

記 述 理 論 の 成 立

土 屋 純 一

バートランド・ラッセルは *Mind* の1905年10月号に *On Denoting* (以下 OD と略記) を発表した。哲学史の常識ではこの論文の内容は確定記述の理論だという。だが表題は「表示について」⁽¹⁾の意であって、「確定記述の理論」ではない。これは術語の定着の時期だけの問題ではない。書出しを見ると分るように、確定記述は表示の理論の中に位置づけて論じられている。そして表示の理論は OD の2年前の著 *The Principles of Mathematics* (以下 PoM と略記) の説を承けたものである。従って OD の理解のためには、確定記述の理論を遊離させず PoM 以来の表示理論の文脈で読む必要がある。確定記述の理論そのものならば後年ラッセルがもっと整理した形で述べている⁽²⁾が、ラッセル哲学の形成過程に関心をもつときには、PoM と OD が根本資料となる。そこで小論では第一節で PoM の表示理論を調べ、OD との関聯を明かにする準備とする。OD の解釈は第二節以下で述べる。

一

PoMの出版は1903年であったが、原稿の大方は1900年に書かれたようで、完成は1902年5月だと言う。⁽³⁾ この本には数学の哲学的・論理学的基礎のみならず、後の用語で言えば意味論に属する問題が、ごたごたした形でではあるが盛沢山に論じてある。PoMの第二版(1937)を出したときラッセルが序文を付加えて、この本の内容の中でも意味論の基本的前提が、記述理論に始まる自分の後の仕事に照してみると誤りであったと分ったと書いたためか(PoM, p. x)、PoMとその後のラッセルの意味論とが連続する面は聊か軽視されてきたように思われる⁽⁴⁾。

まずPoMにおける、命題(proposition)とその構成要素(constituents)に関する説について述べよう。

PoMでは何であれ思考の対象となるものはすべてターム(a term)と呼ばれた。タームはすべて一(one)と数えられるので、unitとかindividual と言ってもよい。これは存在論上最も広いカテゴリであって、人も瞬間も数もクラスも関係もキマイラも、それについて一つということが言える以上すべてタームである。タームはすべて或る意味で“ある”(Every term has *being*, i.e. *is* in some sense)。entityとも呼べる。しかしかのものはタームではない、と言

えばそれは必ず偽となる (PoM, p. 43)。

タームに関して最も重要なことは、それが命題の構成要素として現れることである。その命題の真偽は問わない。『どの命題のどの構成要素も一つと数えられること、二つ未満の構成要素を含む命題はないことは、否定できぬと思われる』(PoM, p. 44)。

(1) Socrates is human. (ソクラテスは人間だ)

によって表される命題を取ってみよう。これは二箇のタームを含み、それが主語―述語形式という論理形式(logical form)によって統一されていると考えられる。このとき主語であるタームSocratesはひとつの事物であり、述語として現れた *human* は概念であって事物に適用されているというのが自然な見方であって、Socratesを*human*の述語と見ることはできぬ。ここにタームの中に事物(things)と概念(concepts)との二種のカテゴリを区別すべき理由がある。(PoMの約束では概念の名を挙げて言うときにはイタリック体で書く。)

ラッセルは事物と概念の区別に、それを示す記号(語)の種類の区別を対応させた。事物は固有名(proper names)によって示される。概念はその他のすべての語によって示される(PoM, p. 44)。彼は語(句)によって事物や概念を示しうるのはなぜかという問には興味を示していない。語はすべて意味をもつ。それは語と、何かその語以外のものごとの関係であって、この関係に「示す」(indicate)とか「表す」(stand for)という言葉当てた。⁽⁵⁾ この関係が成立っていなければ語とも言えない。だが彼はこちらは心理の問題だと片付けた。ラッセルの関心は命題の構成要素としてのタームの意味の方にあった。

ラッセルも文と命題とを区別しないで言うことがあるが、正しくは文は語の配列であって命題ではない。文は命題を表現するのである。⁽⁶⁾ 命題は語を含むのではなく、語によって示される存在(ターム)を含むのである。勿論、語についての命題というものもありうるが、このときは語がタームとして命題に現れたことになる(PoM, p. 47)。

さて命題(2)の意味を考えてみよう。(厳密に言えば文(2)の表す命題と言うべきであるが、以下簡略のため上の言い方に従う。)

(2) I met a man. (私は或る人に会った)

まず‘I’という固有名(としておく)で示される事物即ち私は(2)の構成要素である。動詞‘met’についてはしばらく措く。残る‘a man’の示すものはさきの定義によって概念である。これも命題の一構成要素の筈である。

しかし、とラッセルは考えた。私が会ったのはとにかく現実の一人の人間であって人間の概念に出会ったわけではない。(2)は私についての命題で、私は(2)の論理上の主語(a logical subject)である。だが*a man* という概念についての命題とは言えない。

(3) Man is mortal. (人間は死ぬ)

についてはどうであろうか。一見、概念 *man* が(3)の論理上の主語であるように思える。けれども概念が死ぬことはあるまい。文の文法上の主語が必ず命題の論理上の主語に対応

するのではない。(3)は人間という概念についてではなく、事物——現実の個々の人間たちすべて——についての命題と考えたいのだが、そのためには何が必要であろうか。

ラッスルの答はこうである。(2)に現れる *a man*, (3)に現れる *man* のごとき概念と、概念ならざる事物との間に、それぞれ或る特異な関係が成立している。それが表示関係(denoting relation)である(PoM, p. 53)。

『記述ということが可能であるという事実、つまり概念を使って概念ならざるものを表し(designate)うという事実は、概念とタームとの間の或る論理的关系によるのである云々』(loc. cit.)⁽⁷⁾

概念のすべてが表示作用をもつのではない。表示をする概念はむしろ特例なのである。(2)に現れた概念 *met*、(3)に現れた概念 *mortal* ももとより命題の構成要素だけれども、(2)、(3)はそれら概念についての命題ではない。但しわれわれは(2)と等値な命題「出会うという関係が私と或る人との間に成立した」、(3)と等値の命題「死すべきものという性質が人間に属する」を得ることはできる。これらは当の概念(関係も含めて言う)についての命題となる(cf. PoM, p. 45)。

ラッスルは(2)の *a man*, (3)の *man* のような概念を特に「表示概念」(denoting concepts)と言った。彼は専ら英語について考えて、これに6種を挙げた。‘man’から出発すると

a man; some man; every man; any man; all men; the man.

(‘man’は(3)のように裸でも使えるがそれは上の6種のどれかと同義というつもりであろうか。)

これら表示概念は、形式上クラス概念(class-concepts)を示す語句に冠詞又は量を示す形容詞⁽⁸⁾を頭に付けて得られた表現で示される。英語に限って考えても上の6種で表示概念の可能なすべての形式を盡しているかどうかは別に説明はない。

これらの概念が対象を表示するのはいかにしてか。表示概念はいずれもクラス概念から派生する。*u* がクラス概念であるのは、命題函数‘*x is a u*’がその外延としてクラスを定めることだと理解されている(PoM, p. 56)。ラッスルが力を入れたのは表示概念(但し6種のうち‘the’で始まるのを除いて)の機能の違いを、命題函数の変項をクラスの成員であるタームで置換えて得られる命題相互の論理的結合の違いとして説明することであった。

その実質は命題の量の理論(quantification theory)である。まず原初的表示関係(primitive denotation)とでも言うべきものを想定し、大まかに言えば連言と選言を結合の形式として、全称命題と特称命題に当るものを構成しようとした。ラッスルはその際6種の表示概念の作用の異同を説明するためにいろいろ工夫を凝らしている。それは今日の論理学の慣用の方法に比べれば煩雑であるが、英語の‘a’, ‘some’, ‘all’, ‘every’, ‘any’などの表現の示す論理的なふるまいの相違について一貫した説明を与えようとしたものとして価値がある。⁽⁹⁾

しかし表示概念群の最後の一つ *the a* については PoM は十分な説明をすることができず

に終わった。それはただ一つの確定したターム (one single definite term) を表示する概念とされた。例えば1905年現在の英国の、という了解の下で、*the King* や *the Prime Minister* がそれである。問題はこれらと固有名との違いがどこにあるかである。

PoMではラッスルは手掛りを同一性を述べる命題の考察に求めた。

(4) Edward VII is the King. (エドワード七世は〔現在の英〕国王である)

と言え、『われわれは同一性 (an identity) を主張しているのであるが、この主張をする値打があるのはなぜかと言え、〔同一性関係の項の〕一方には〔エドワード七世という〕現実のタームが現れ、他方には〔現在の英国王という〕表示概念が場所を占めているからである』(PoM, p. 64)。従ってここでは、固有名の名指すもの (現実の一人の人間) と、(後のラッスルの術語で言えば) 確定記述句によって示された表示概念とが、それぞれ命題の構成要素になっていると見られる。また『2箇の表示概念が現れて、ターム自体の名が挙っていないこともよくある。例えば「現在の法王は彼の世代の最長老である」という命題の場合である』(loc. cit.)。

「ソクラテスは哲学者だ」という命題において、ソクラテスはその構成要素であるが、固有名を表示句で置換えた命題「クサンティッペーの夫は哲学者だ」において、表示概念の対象つまりソクラテスがこの命題でも構成要素だとは言えない。もしこう言うと両者が同一の命題になってしまう。にも拘らず後者はソクラテスについての命題である。——PoMにおける *the a* の分析は結局ここまで終わった。

さて表示概念の中で厄介な問題になるものは、命題函数 '*x* is an *a*' が *x* のすべての値に対して偽であるときであろう。このとき *a* は空なるクラス概念であって、かかる *a* から派生する表示概念は何ものをも表示しない (PoM, p. 74)。例えば命題函数 '*x* は黄金で出来ており、かつ山である' を満足する *x* の値はないから、“黄金の山” は表示概念と言っても、その表示する事物はない。

しかし同時にラッスルは、表示対象を欠く概念も命題の構成要素と認めるべき理由があると考えた。『数、ホメーロスの神々、関係、キマイラ、四次元空間はすべてbeingをもつ。これらが或る種の entities でなかったとしたら、それらについての命題を作ることもできぬであろう』(PoM, p. 449)。概念はつねに命題の論理上の主語となりうる。

問題の最も単純なケースは存在否定命題 (negative existentials) において認められる。命題「*A* はない」(*A* is not) において、*A* がいかなる意味においてもないとしたら、これは無意味であって命題とも言えぬ (*A* はタームではなくなる) か、さもなければつねに偽である。ここから、(表示)概念が表示する対象は存在 (exist) しなくとも、或る意味で“ある”と考えておかねばならぬという見方が支持される。“Existence” は “beings” の中の或るもののみのもつ特権である (p. 449)。従ってPoMの立場は後にラッスルが批判することになる所謂マイノング説を含んでいるのである。

しかしこれは、語はすべて何らかの対象を表すという、意味の素樸實在論(?)と混同されてはならない。たしかにラッセルは、語は何か当の語以外のものを示す、と言ったが、それは『論理学とは関係がない』(p.47)。論理学(今日では意味論と言うべきか)が問題にするのは、命題を構成する要素は何か、それらはいかにして命題の意味を成立させるか、に関する問である。¹⁰⁾

厳密に言えば『概念の中でも表示する概念のみが意味(meaning)をもつ』(p.47)。しかしこれは表示対象を欠く表示概念の問題に突当って存在論的には不透明な処理を余儀なくされた。O Dはそれに思い切った解決を施した。それは表示概念が命題の構成要素であることを否定するものだったのである。

*

O Dの説は次節以下で扱うが、O Dに先立って *Mind* 1905年7月号に発表された *The Existential Import of Propositions* ¹¹⁾は、「存在」(existence)の概念の明確化を進めたものとして注目に値する。ここでは既にPoM説が否定されている。哲学及び常識における「存在」の意味と、論理学及び数学における「存在」の意味とは異なる。後者においては「Aは存在する」とは「Aは少なくとも一つの成員をもつクラスである」ことに他ならぬ。ソクラテスのようにクラスでないものは、存在しない。ラッセルが後に繰返し言う、固有名を主語とする存在命題は無意味であるという説の原型がここに見出される。

表示句の場合はどうか。『「現在の英国王」は或る個物を表示する複合概念(a complex concept)である。〔これに反し〕「現在のフランス国王」は同じく複合概念であるが何も表示しない。この句は或る個物を指し示そうというつもりなのであるが、それができぬのである。それは或る実在せぬ個物を指し示すのではなくて、個物を全然指し示さぬのである』(EIP, p. 100)。なぜそう言えるのかを詳しく示す仕事はO Dに引継がれた。

二

O Dは次の書出しで始まる。『「表示句」(denoting phrase)と私の言うのは次のような句である……』(p. 41)。表示とはどういうことかについての直接の言及はなく、10箇の句が例示される。前半5箇はPoMに掲げられたのと同じで、後半だけが異なるが、それらは皆、‘the’で始まる句である。‘the present King of England’(「現在の英国王」)、「the present King of France」(「現在のフランス国王」)云々。表示句はその機能よりもまず形態によって提示される。

PoMは表示概念を論じた。O Dは一見表示句の作用を直接に論じて行くように見える。だが表示句それぞれにその意味するものを割当てて行く方法は取れない。なぜなら表示句

はそれだけを分離して取出したときには“意味がない”からである。

これは異様に聞える。表示句は単独で意味があると思える。だがそれは高々、すべての語句が自身以外の何かを示すということであって“言語上の意味”の問題であった。表示は“論理上の意味”に関わる。表示句の機能はそれが現れる文の表現する命題において始めて理解されるという趣旨で、表示句はそれだけでは意味がないと言った。文に現れた表示句がそのまま命題の構成要素なのではない。(この点に後で取上げるように固有名と表示句の著しい相違がある。)

命題の構成要素の統一の形式は論理形式である。日常言語の文を、文法形式ではなく論理形式が明かになるように論理学、特に命題函数の理論を使って書直す⁽¹²⁾ ことによって、命題の本当の構成要素が何であるかが決まるとラッセルは信じた。少くとも何が構成要素でないかが分ると信じた。O Dはまず計画のネガティブな部分の実施から始まっている。目的は同じでもPoMとO Dとでは分析の方法が変わった。

命題函数がO D理論においても根本的な役割を果たす。変項が一つの場合のみにについて言えば、命題函数は変項 x を構成要素とする命題と見て、‘ $C(x)$ ’と書かれる(‘ C ’は‘Constituent’の頭字であろうか?)。命題函数の一般化は、O Dでは量記号 (quantifier) が用いられず、命題函数についてのメタ命題として述べられた。一般化の基本型は

$C(x)$ is always true

であって、他の型はこれから派生する。

(5) All men are mortal. (すべての人は死ぬ)

PoMではここに表示概念 *all men* が認められたが、O Dではそうはならない。(5)を命題函数とその一般化に書直す。(5)の言わんとする所は(6)である：

(6) ‘If x is human, x is mortal’ is always true.

表示句 ‘all men’ は(6)にはもはや現れない。(5)の論理上の主語は *all men* でない。表示概念 *all men* を認める理由がない。‘(is) human’ という句は(6)に現れるが、これは ‘(is) mortal’ と同様、PoMの立場で言っても、概念が述語として現れているのであって表示概念ではない。O Dの立場では ‘human’ は命題函数 ‘ x is human’ の中に一体化されていると言うべきであろう。(5)は一見 *all men* に関する命題に思われても、(6)の示す通り命題函数の満足 (satisfaction) に関する (メタ) 命題なのである。

PoMの例題 (再掲)

(2) I met a man.

もやはり命題函数とその一般化に書直せる：

(7) ‘I met x , and x is human’ is not always false.

PoM説では何か “ambiguous man” とでも言うべき対象を表示する概念 *a man* が認められたが、O D説ではそれは全く不要である。

表示句がそれが現れる文の中で解体され消去されることによって、PoM説の主題であった、概念によって事物を表示することがいかにして可能かという問自体も解消せられた。これは人によっては、はなはだアド・ホークな分析であって、(5)や(2)が上のように分析できるとしてもそうしなければならぬ理由はない、と感ぜられるかも知れない。その説得のためには、文法形式上は(5)や(2)と類似していても論理形式が非常に違う文を示すとよいかも知れぬ。そこで(5)、(2)に出る表示句をそれぞれ固有名で置換えた文を作ってみる：

(8) Socrates is mortal.

(9) I met Socrates.

(5)と(8)の論理形式の差は、例えば否定詞の作用範囲 (scope)に関する感受性 (?) の差として現れる。⁽¹³⁾

(10) Socrates is not mortal.

(11) Not: Socrates is mortal. (= It is not the case that Socrates is mortal.)

(10)と(11)は同じことである。しかるに(12)と(13)は等値でない：

(12) All men are not mortal. (=No man is mortal.)

(13) Not: All men are mortal. (=It is not the case that all men are mortal.)

固有名は否定詞の作用範囲の違いに免疫であるが、表示句はそうでないことが分る。

又、ソクラテスは(8)、(9)のいずれにおいても命題の論理上の主語、構成要素であって (これはPoMから承継がれた見解である)、ソクラテスは存在すると言える⁽¹⁴⁾ が、(14)は(2)からは言えても(5)からは言えない：

(14) Something is human. (= ‘x is human’ is not always false.)

いわゆる existential import に関して、固有名と表示句とでは違いが出る場合のあることが知られるであろう。

O Dでラッスルが力を注いだのは、表示句の中でも、ただ一つの対象を特定して表示すると見られる句の扱いである。英語ではその形は‘the so-and-so’ (‘the (only) F’) であって、後に「確定記述句」(definite descriptions)と呼ばれた (単に「記述」とも言う)。この種の句はその建前からして固有名ときわめて近いようにも思える。確定記述句を主語とする文の論理形式は例えば(8)と同じになるように思える。しかるにラッスルが示したのは、意外なことに、それはむしろ(5)や(2)のもつ論理形式に近いということであった。確定記述句も、その他の表示句とほぼ同じ方針で、書換えによって消去されるのである。O Dの実質が確定記述句の理論であると言うのは誤りではないにしても、ラッスルの意図したものは表示句の統一的処理であったことを忘れてはならない。確定記述句の消去の技法は、不定記述句(対象をどれと一義的に定めぬまま表示するように見える句、例えば‘a man’をこう呼んでよかろう)に対しての場合と並行的なのである。⁽¹⁵⁾

O Dで分析の実例として詳述されたのは確定記述句‘the father of Charles II’を主語とす

る文である：

(15) The father of Charles II was executed. (チャールズ二世の父は死刑にされた)

分析の第一歩は、変項を使いながら(15)を(16)と(17)の二つの部分に分けることで：

(16) x was the father of Charles II.

(17) x was executed.

(16)には確定記述句がまだそのまま出ているが、もし(16)に出る変項 x がチャールズ二世にとって父親であるという条件を満たすのみならず、それは高々一つしかないということ(uniqueness)をも併せ述べれば消去に成功する。それには、変項 y として何をとっても、もし y がチャールズ二世にとって父親であれば、かかる y は x に他ならぬ、と書添えればよい。即ち(16)は(18)と等値である：

(18) x bagat Charles II; and 'if y bagat Charles II, y is identical with x ', is always true of y .⁽¹⁶⁾

結局(15)は(17)と(18)の両条件を満たす x の存在を主張する命題となる：

(19) It is not always false of x that x bagat Charles II and that x was executed and that
'if y bagat Charles II, y is identical with x ' is always true.

以上は O D の原文を辿って述べたが、後にラッスル自身もそうしたように、量記号を使い、かつ命題函数や連結詞も記号で置換えればずっと見易くなる⁽¹⁷⁾：

(20) $(\exists x) [Fx \cdot Gx \cdot (y)(Fy \supset y = x)]$

これは(21)と等値だから、こちらでもよい：

(21) $(\exists x) [Gx \cdot (y)(Fy \equiv y = x)]$

(20)が(7)とよく似た形式であることに注意しよう。(7)の記号化を進めると

(22) $(\exists x)(Fx \cdot Gx)$

に帰着する。大きく見ると(20)も(22)もその論理形式は存在命題 ' $(\exists x)(\dots x \dots)$ ' である。違うのは(20)では命題函数を満たす対象が高々一つしかないということが付加している点のみである。後にラッスルは『‘the so-and-so’ が[不定記述句]‘a so-and-so’ と違うところは前者が唯一 (uniqueness) という含みをもつ点だけである』と言った (IMP, p. 176).⁽¹⁸⁾

これに対し、日常言語に即して考える限り、(15)は

(23) チャールズ一世は死刑にされた

と似ているけれども、(23)の論理形式は

(24) Ga (' a ' は固有名)

であって、(15)のもつ論理形式と著しい違いがある。(23)では固有名⁽¹⁹⁾の名指す対象がそのまま命題の論理上の主語である。それに反し(15)では表示句が文法上の主語であって、それは命題の論理上の主語を表していない。

それにしても、表示句の消去を実施すべき理由は何であろうか。表示句の表す(stand for)ものがそのまま命題の真の構成要素であるとしてはなぜいけないのか。ラッスルの論法は、

後者の考え方に立つものとしてマイノングとフレーゲの説を挙げ、それらが論理的に受容れ難い結果を必ず生ずるとして斥けるというものであった。O Dはこの反対論証の方にかなり力を入れると同時に、マイノング説、フレーゲ説を必要とした諸問題は、ラッセル説によってよりよく解決されることを論じている。第三・四節でこれらを順に取上げる。

三

表示句が何ものをも表示しないときですらも、これを命題の論理上の主語と認めざるを得ない場合があるようにも思える。例えば「現在のフランス国王」を取ろう。なるほど

(25) 現在のフランス国王は禿頭である

については、果してこれが有意味な命題であるかどうか、まず首を傾げる人も多かろう。命題には真理値のあることが要求されるのに、(25)は真とも偽とも言えぬような気がするからである。だが

(26) 現在のフランス国王は存在しない

は真なる命題である。(26)の場合「現在のフランス国王」は命題の論理上の主語を表示するように見える。それなら(25)の場合にも？

「現在のフランス国王」が余分なイメージを伴うようなら、O Dの別の例でもよかろう：

(27) AとBとの違いはない

が真であるためには、「AとBの違い」(‘the difference between A and B’)の表示するものが何かまずあって、かつそれが存在しないのでなければならぬのであろうか(O D, p. 48)。これは存在否定命題に関わる古来の難問である。(26)や(27)のような存在否定命題が真ならば、その命題がそれについて成立っている当の対象が存在しない。それでは存在否定命題は何についての命題でもないのか。もしそうならそれが有意味だとどうして言えるか。

ラッセルによるとこの問の答え方は二つしかない。一つは、存在否定命題が真であれば、(a)その命題に関わるものは無論存在(exist)しないけれども、(b)その命題が成立つためには存在が否定された当のものが、或る意味で“存在”しなければならない、として、「存在する」を二義に使い分ける方針である。²⁰⁾ もう一つはO Dのラッセルが取った解決で、それは(b)を否定するものであった。「存在する」には一つの意味しかない筈である。

前者の説をラッセルはマイノングに帰したが、それは既に述べたようにPoMでのラッセルの見解でもあった。もっともこれは所謂マイノング説であって、マイノング自身の考えにどこまで忠実かは議論の余地がある²¹⁾が、今その点に立入る違がない。それは表示句の表すものがそのまま命題の構成要素であるとする立場の最も単純な形と見られているが、フレーゲ説もまた大掴みに言えばこの類だとラッセルは解した(後述)。

マイノング説では黄金の山 (der goldene Berg) のような仮空の存在も対象である。のみならず円い四角 (das runde Viereck) のような、矛盾した規定をもつ不可能な存在すらもやはり対象である。「円い四角は存在しない」('Das runde Viereck existiert nicht') が真であるためには、円い四角の或る意味での存在が必要だとも考えうる。

ラッスルは、これは矛盾律に反する、として反対した。彼によるとマイノング説では

(28) 円い四角は円い

(29) 円い四角は四角だ

は共に真である。ところで誰もが認める通り

(30) 四角なものはどれも円くない。

(29)と(30)から

(31) 円い四角は、円くない

が言える。(28)の「円い四角」と(31)の「円い四角」が同じものを表示すると見れば、次の矛盾に陥る：

(32) 円い四角は円く、かつ円くない。

ラッスル自身の解決はさきの(15)の分析を想起すれば明かである。これを存在否定命題が確定記述句を含む場合に適用すると、さきの(26)は次のようになる：

(33) $\sim(\exists x)[x \text{ は現在フランスを王として統治している. } (y)(y \text{ は現在フランスを王として統治している} \supset y = x)]$

これは真である。「現在のフランス国王」が何か一種の対象を表示しているという想定は全く必要がない。

この分析の長所は、(25)が真でも偽でもない命題になるのではないかという疑念を払拭して、真理値二値の原理 (the principle of bivalence) を貫けるという点にも認められる。なぜなら、(25)の論理形式は、(15)と同様に(20)であって、

(34) $(\exists x)[x \text{ は現在フランスを王として統治している. } x \text{ は禿頭である. } (y)(y \text{ は現在フランスを王として統治している} \supset y = x)]$

となる。(34)は明かに偽である。残る問題は、(25)の否定命題と見受けられる

(35) 現在のフランス国王は禿頭でない

が、真と言えるかどうかである。

禿頭でないものを枚挙したリストを作ってもその中に現在のフランス国王は挙って来ようがないので、(35)も偽であるようにも思えるが、そうすると排中律が犯されることになりはしないか。ラッスルはしかし、(35)が単純に(25)の否定だとは決めかねることに注意した。日常言語の文(35)は構文上二義的であって、(36)のようにも読めるが、また(37)とも理解できる：⁽²²⁾

(36) $(\exists x)[x \text{ は現在フランスを王として統治している. } \sim(x \text{ は禿頭である. } (y)(y \text{ は現在フランスを王として統治している} \supset y = x)]$

(37) $\sim(\exists x)[x \text{は現在フランスを王として統治している} \cdot x \text{は禿頭である} \cdot (y)(y \text{は現在フランスを王として統治している} \supset y = x)]$

(37)と(25)とは互に矛盾するから、(25)が偽であれば(37)は真である。しかるに(36)の方は偽であるが、これは(25)の否定ではないので、別に排中律に反したことはない。

従って排中律が維持できるようにということで(25)や(35)は命題ではない、無意味である、として真理値を認めずにおくという用心は必要のないことなのである。

以上述べたように、O Dの表示理論は、不定記述句の場合はもとより、確定記述句についても、その表示する対象を措定する必要はなく、又措定すべきではないと主張する。それがマイノング説乃至PoM説との対比において、存在論上のデフレーション効果を齎したとは、よく指摘されるところである。その動機にラッスルの言う a sense of reality を挙げるのもよからう。しかしラッスルの企図したものが同時に一つの“意味の理論”の提示であったことにも留意すべきである。PoMに著しかった意味に関する実在論は（部分的に）廃止された。表示句の意味はそれだけ独立にではなく、表示句が現れる命題の文脈の中で理解されるべきである。これは裏返して言えば、殊に確定記述句に関しても、ラッスルは直接にその定義を与えたのではなく、或る文脈におけるその消去の仕方を示した、ということでもある。表示句はそれが現れる命題の論理形式に着目して書直される結果、もとの形態は失われるが、やはり命題全体の意味に寄与しているのである。

残る問題は、命題の意味はいかにして成立するかということである。しかしO Dの段階でのラッスルの検討は、命題の本当の構成要素は何でないかを論ずるに急であって、何であるかは（若干の示唆はあるにしても）殆ど述べられていない。この“若干の示唆”は、見知りによる知識(knowledge by acquaintance)と記述による知識(knowledge by description)との区別と関聯の主張として与えられている（第五節）。その前に、O Dが検討しなければならなかった今一つの有力な意味論であるフレーゲ説に対するラッスルの解釈と批評について考察する。

四

ラッスルはPoMに付録をつけてフレーゲの仕事の紹介と批評を行ったが(pp. 499-522)、意味に関するフレーゲの説はO Dで再び取上げられた。それは1892年の論文 *Ueber Sinn und Bedeutung* の説である。順序としてまずPoMにおけるフレーゲ解釈を必要な範囲内で引く。

PoMでラッスルはフレーゲの Sinn に meaning, Bedeutung に indication という訳語を当てた。Bedeutung は記号 (Zeichen) の表すものであり、ラッスルの術語に言う indication は語の

機能とされていた。フレーゲでは *Bedeutung* は対象であって心理的なものではない。しかるに PoM 説では対象を表示する作用は表示概念に帰せられる。そこでラッスルは次の解釈を与えた。『*meaning* (*Sinn*) と *indication* (*Bedeutung*) という〔フレーゲの〕区別は、厳密にはないが大体私の、概念そのもの (*concept as such*) とその概念の表示するものとの区別に相当する』(PoM, p. 502)。

これは明かに誤解である。フレーゲの *Sinn* は PoM 説の(表示)概念ではない。にも拘らずラッスルがこう解したのは何故であろうか。

フレーゲは記号に *Bedeutung* と *Sinn* とを単に割当てたのではなかった。*Sinn* は対象の与えられ方 (*die Art des Gegebenseins*) の中に含まれ、*Bedeutung* を限定する(筈である)。PoM 説で類似の機能を果すものは表示概念なので、敢えて PoM 説の枠の中でフレーゲ説を理解しようとして、*Sinn* にいちばん近いものは表示概念だとラッスルは解したのではないか。

固有名 (*Eigenname*) が *Sinn* と *Bedeutung* をもつというフレーゲ説が PoM で既に斥けられた根拠もこの前提の下で理解できる。『*‘the’* を使って概念から引出された固有名〔ラッスルでは表示句〕のみが *meaning* をもつと言えるのであって、*‘John’* のような語〔ラッスルの意味での固有名〕は単に *indicate* するのみで *meaning* はないように思われる』(PoM, p. 502)。ここでは「*meaning* をもつ」とは「表示概念の記号になっている」という趣旨である。PoM 以来の説では固有名はそのまま事物を“示す”ので、概念の媒介を要しない。

しかるに O D のフレーゲ批評の条では、*Sinn* が *meaning* と訳されていることには変りないが、*Bedeutung* の訳語には *denotation* が当てられた。

Sinn と *Bedeutung* との区別に一つの効用があることをラッスルはひとまず認める。それは同一律をめぐる難問に答えうるからである。彼が同一律と言っているのは次の二つのことである。

(PI 1) $a = b$ ならば、 a について真であることは b についても真である。

(PI 2) $a = b$ ならば、任意の命題において、そこに現れている *‘a’* を *‘b’* で置換えても、得られた命題の真理値は前と同じである。

ところがこれらの原理を適用すると変なことになる場合がある。いま

(38) Scott is the author of *Waverley*. (スコットはウエイヴァリの作者である)

(39) George IV wished to know whether Scott was the author of *Waverley*.

(ジョージ四世はスコットがウエイヴァリの作者であるかどうか知りたいと望んだ)

が共に真だとする。(38)の論理形式は $a = b$ と見受けられる。そこで(39)に (PI 2) を適用して(喧しく言えば $a = b$ から $b = a$ を言ってから)、*‘the author of Waverley’* を *‘Scott’* で置換えると、(40)が得られる：

(40) George IV wished to know whether Scott was Scott. (ジョージ四世はスコットがスコットであるかどうか知りたいと望んだ)

だが(40)は真ではない。ラッセル曰く、『ジョージ四世は同一律に興味を示したのではない』(OD, p. 48)。これはパラドクスに見える。

これが見掛けのパラドクスにすぎないことはフレーゲ説でよく説明できるのである。大雑把に言えばこうである。‘ $a = b$ ’が真のとき、固有名(フレーゲの言う固有名には確定記述句も入る)‘ b ’の *Bedeutung* は‘ a ’の *Bedeutung* と同一である。従って命題‘ $a = b$ ’の真理値は‘ $a = a$ ’の真理値に等しい。しかしこの場合も‘ b ’の *Sinn* は‘ a ’の *Sinn* と異ることがありうる。そのため命題‘ $a = b$ ’で表現された“考え”(Gedanke——命題の表す *Sinn* に対するフレーゲの術語)は‘ $a = a$ ’のそれと異なる。‘ $a = b$ ’は認識の拡大となるが‘ $a = a$ ’はそうではない。(39)のように「……ということを知りたいと望む」のような文脈では、「……」に入る命題の表す真理値ではなく考えの方が問題になるので、‘ a ’と‘ b ’が同一の *Bedeutung* をもつというだけの条件で置換を行うことが許されぬのである、と。

ラッセルのいわゆる同一律に関する難問なるものに対してフレーゲ説は上のような解答を用意しているのだけれども、ODのラッセルは、確定記述句に *Bedeutung* と *Sinn* の二系列の“意味”を認めるのに反対した。

まず問題になるのは表示対象を欠く確定記述句の扱い方である。この問題についてフレーゲには二つの異った考え方があったと思われる。

(a) フレーゲは複合的な言語表現の表示対象(命題の場合は真理値がそれである)はその構成部分の表示対象によって定まるという原則を立てた。従って(25)の主語に表示対象がない以上、(25)は真理値を欠くことになる。ラッセル説では(25)は存在命題を含意するが、フレーゲ説では表示対象の存在を前提にするのである(Frege [SuB], S.40)。一般に命題 p が q を前提にしている(presuppose)とき、 q が偽であったり、生じない問に対する答であったりする場合には、 p の主張は偽ではなくて、単に的外れ乃至見当違いということになる。

(b) しかし彼はまた表示対象を欠く固有名が現れることは自然言語の欠陥だとも考えた。論理的に完全な言語では真理値を欠く命題を認めず、二値の原則を貫くべきである。そのため必要ならば固有名が表示対象を欠くときは、純然と規約上のこととして、例えばゼロという数を割当ててもよいとした(Frege [SuB], S.42, Anm.⁽²³⁾)。

付言すれば(a)は後にストローソンによって、(b)はカルナップによって再び取上げられ洗練された考えである。⁽²⁴⁾

ODでラッセルがフレーゲの方針と認めたものは(b)の方である。ラッセルによれば(b)はマイノング説のように矛盾律を犯すという誤りに直結するものではないが、人工的(artificial)であって事態の正しい分析にならぬと言う(OD, p. 47)。人工的と言えば、確かに規約の決め方によっては若干の不都合が生じる場合がある⁽²⁵⁾。

ODにはもう一つ、表示句に独立の意味を認めれば困難に陥るが故に、その存在は認められぬとする、はなはだ難解な論証が展開されている(pp. 48-51)。その論証なるものが果

してフレーゲ批判であるのか、又批判として成立つかどうかについては、多くの人が疑問を呈してきた。⁽²⁶⁾ ともかくそれは表示句に meaning と denotation との二系列の意味を認めることはできぬという趣旨であるから、フレーゲの名が挙っていないけれども、ラッスルはやはりフレーゲ批判として提出したのであろう。

表示句の意味(meaning)とそこで言われているものは“言語上の意味”ではなく、表示対象を論理的に定める筈のものである。ODにおいてもPoMでのフレーゲ解釈が承継がれている。それはmeaningをPoMの表示概念の機能に帰するもので、これを斥けることは結果的にPoMの表示作用の説に対するラッスル自らの批評ということになる。実は、ODでは‘denoting complex’(表示複合体)という見馴れぬ術語が断りなしに使われていて戸惑うが、これは表示概念のことだと解するのが妥当と思われる。⁽²⁷⁾

ラッスルが示そうとしたのは、『意味と表示対象との連結を保ちつつ同時に両者が同じものになってしまうようにしておく』(OD, p.49)ことができぬ、というディレンマである。これが正しければ表示句そのものと独立に表示句の“意味”を指定する理由が失われる。

表示句をCとする。Cが命題の中に現れるとき、Cは使用されて(used)いるのであって、われわれはCの表示対象について語っている。しかしPoM説を想起すると、Cが対象を表示するのは表示概念による。これを「Cの意味」と呼ぶとしよう。ラッスルの約束ではこれを「C」と書くが、これは現代の慣用と違っていて紛らわしいから、ここでは「M(C)」にする。

M(C)について語ろうとするためには、それを表示する句が命題の主語として現れる必要がある。ところが、このとき当の命題の論理上の主語はM(C)の表示対象即ちCそのものであるとラッスルは考えた。普通に考えればこの命題の論理上の主語は表現「M(C)」によって名指されるものとなるが、ラッスルはM(C)は表示概念であって言語表現ではないという前提を貫こうとしたのである。『複合体[=表示概念=表示句の“論理上の”意味]を命題の中に入れた途端に、この命題は表示対象についての命題となる』(OD, p.49)。

これだとM(C)について語りえないから、今度はM(C)を表示対象としてもつ高次の表示概念M'(M(C))を想定してみる。M'(M(C))の現れる命題はM(C)について語る命題となるように見える。ラッスルはこちらの選択肢も斥けたが、その理由はこれではM(C)とM'(M(C))の関係がいかなるものかが理解できない、というにあった。これは表示概念を表示する概念がPoMでは認められていなかったということであろうか。

ラッスルの立場では表示句に独立の意味を認めることは、有効でも必要でもない。同一律に関わるさきのパラドクスを解くにはフレーゲ説を要しない。彼は(38)が表示句を含むことに着目した。さきの(18)に倣って(38)の書換えを実行すれば、(38)の論理形式は‘ $a=b$ ’ではないことが判る。従って同一律が適用されることもないから、パラドクスは生じない。(38)は実

は(41)である:

- (41) Scott wrote *Waverley*; and it is always true of *y* that if *y* wrote *Waverley*, *y* is identical with Scott.

ラッスルのこの“解決”には二つの点で疑いが残るであろう。第一は、なるほど(38)のように、同一性記号を挟む一方の辺が記述句である場合はよいとしても、クワインの例題‘Cicero=Tully’のように両辺ともに固有名が現れる場合は同一律が適用されようから、パラドクスの可能性がまだ残っているのではないか、という疑問である。

第二に、(41)にもう一度目を向けると、分析の結果

- (42) Scott wrote *Waverley*.

が基本的な要素として残っていることに気がつく。言うまでもなくここで‘Scott’は固有名である⁽²⁸⁾。固有名も確定記述句も共にただ一つの確定した対象を表示するのが建前であって、その限りでは同等だと思われるのに、ODの取扱いは中途半端という印象を与える。後になってラッスルが固有名をさらに限定して論理上の固有名(logically proper names)に絞り、逆に記述句を拡大して文法上の固有名をこちらに寄せて考える(下記102頁参照)ことによって、名と記述句の区別と対照をはっきりさせようという方向に向ったのには必然性があった。

ODの段階では必ずしも明言されていないが、ODの分析の実際から解釈すると、ラッスルは固有名と確定記述句との間の根本的な相違を次の二点に認めたと思われる。

(i)固有名は文脈と独立にそれ自体で“意味”(meaning, significance)をもつ⁽²⁹⁾。確定記述句は、他の表示句と同様、本来文の一部分として現れ、独立には“意味”をもたぬ。

(ii)固有名が命題に現れる基本の形式は‘*Fa*’である。このとき固有名の名指す対象は命題の本当の構成要素である。確定記述句は、他の表示句と同様、それが現れた文の中で消去されるので、この文が表す命題の構成要素にそのまま対応することはない。⁽³⁰⁾

かかる固有名と記述句の峻別にはもう一つ認識論上の動機があった。次節でこれについて一言する。

五

命題は思考と認識の対象でもある。そこで『表示作用の問題は論理学と数学においてのみならず、知識論においても非常に重要である』(OD, p.41)。命題の窮極の構成要素は同時に知識のそれでもあるだろう。命題の構成要素が知識論上満すべき条件の検討はODの末尾で着手され、ここに(直接の)見知り(による知識)(immediate acquaintance)なる概念が始めて導入された。その対概念は、記述(による知識)である。

ウェィヴァリの作者や、太陽系の質量の中心について、われわれはいろいろなことを知

っており、これらについての命題を主張できるけれども、作者その人、点そのものを直接見知っているのではない。そこには直接知と間接知とでも言うべき区別がある。見知りの対象に対してはわれわれはその presentation (of)をもつが、記述知の対象は表示句によって得られるのみである。知覚においてはわれわれはその対象（それは感官与件であるというのが一つの解釈である）を見知っており、思考においてもその対象に見知りがある。しかし、表示句で表示された対象には見知りが無い(OD, pp. 41-42)。

従って記述による知識が可能であるためには、表示句を構成している語の意味を見知っていないではならぬと考えられる(OD, p. 41)。しかし繰返し述べてきたように表示句はそれが現れる文の中で消去されるのだから、記述知の対象が命題の構成要素なのではない。そこで次の原理が立てられるべきである：

(PA) すべての命題において、そのすべての構成要素がわれわれの直接に見知っている存在なのでなければならぬ(OD, p. 56)。

これを「見知りの原理」(the principle of acquaintance)と呼ぶことにしよう。

では見知りの対象という認識論上のカテゴリは何であろうか。それはODではなお答えられず、後の著作で詳しく展開されるもので、小論の扱う範囲を越えている。但しわれわれは第四節での検討から、少なくとも固有名の名指すものがその候補に上るのではないかと示唆しておいた。

常識的に考えると、固有名の名指す対象は、ひとの見知っていないものである方がむしろ普通である。ラッスルにしてもチャールズ二世やウォルター・スコットに面識があった筈はない。(PA)の要求は、固有名を文法上の固有名と解する限り、必ずしも満しえぬことは明かである。

解決への手掛りはODで既に示されていた。それはいわゆる空である名(vacuous names, 名指す対象を欠く名)の扱いに認められる。ラッスルは「アポローン」及び「ハムレット」を、「円い四角」や「2以外の、偶数の素数」と同列に扱った(OD, p. 54)。「アポローン」は文法上は固有名かも知れぬが、実は確定記述句だとするのである。アポローンに関する命題の意味するところは、これを例えば古典学の辞典の教える記述、手短かには‘the sun-god’で置換え、後は(15)などに倣って書換えを実施すれば得られる。

ここから、文法上の固有名はすべて実は確定記述句ではないかという後のラッスルの見解に至るにはほんの一步である。固有名「ソクラテス」は私にとって、「ソクラテス」という名で呼ばれ、プラトンの対話篇によく出て来る人で……である(唯一の)哲学者」という表示句の、省略された表現だと考えられるのである。

ラッスルは後に実際、普通の固有名は『約められた記述句』(truncated or telescoped descriptions)だとした(PLA, p. 243; pp. 200-1)。しかし同時に彼は(PA)の要求を満たすべき意味論上のカテゴリとして、論理上の固有名なるものを導入しなければならなかった。

それは厳密な意味における個別者(particulars)を名指す語であって、その個別者に関するいかなる記述とも独立に使用される記号である。通常の固有名を使うとき、ひとはその表示対象を他から区別して取出す(pick out) ために何らかの記述を想定しているのであるから、厳密な意味での(ラッセルの言う論理上の)固有名を見出すことは至難であろう。それは文法上の固有名とはかけはなれた種類の表現にならざるを得ない。⁽²⁾

しかし論理上の固有名の説はラッセルがOD 以後の仕事として進めた還元的分析の中で必要としたものであって、ODで示されたような論理的分析の次元では、普通の固有名が論理上の固有名であるかのように扱ってにおいても差支えないのである。記述理論には還元的分析の動機があったことはさきに述べた通りだが、還元的分析と論理的分析はそれぞれ独立に評価せられるべきである。

OD の説は第二次大戦後二つの方向から批判を受けた。一つはストローソンに代表される「言葉を使うという行為」に着目する立場からのものである。もう一つは、固有名は省略された記述句だとは言えないとするクリプキらの近年の主張である。両者は無論別ものであるが、共にプラグマティクスの観点を加えて指示(reference, referring)を考えようとしたものとして大きな意義を有する。しかし、ODの論じたところは、上に示したように、命題の論理形式と真の構成要素は何かという、PoM以来のテーマの展開であって、「指示の理論」ではなかったのである。ラッセルにおいてプラグマティクスの視点を加えた考察を求めるならば、それは彼の「見知りによる知識と記述による知識」の説の中に断片的に認められると思うが、それは小論の主題ではなかった。

注

- (1)「指示について」という慣用の訳語を採らぬ理由は小論の末尾で示唆される。
- (2)例えば、cf. Whitehead and Russell, Introduction, Ch. III; Russell[IMP], Ch. 16.
- (3)Russell [EA], p. 12にある編者 Lackey の解説による。なお、PoM の原稿を調べた Jager によると、この本はいわゆる patchwork であると言う。Cf. Jager [1972], p. 50.
- (4)雑誌 *Synthèse* は最近 Bertrand Russell's Early Philosophy と題して特集号を組んだ。Cf. Vol. 45, No. 1 & Vol. 46, No. 2. 小論はこの中の Hursthouse, Coffa, Cappio 及び Hylton の諸論文に負う所が多い。又、邦文では夙に野本 [1971]; [1972]の研究がある。
- (5)‘mean’ という語も用いている。ラッセルの用語法は必ずしも一貫したものではない。
- (6)文は命題を indicate するとラッセルは書いてはいないが、Cassin (p. 258) はそう解釈してよいと論じている。
- (7)「論理的」と限定しているのは、「心理的」と「論理的」を対立させて使う当時の通念によるところが大きい。同時に本文89頁で言及する学説を念頭に置いているのである。
- (8)Cappio (p. 188) はこれらを ‘denoting operator’ と名づけるよう提案している。
- (9)この箇所 (PoM, pp. 58–62) の解釈については、Jager [1972], pp. 146–52が最も参考になる。Cf. also Geach [1968], Ch. 3.
- (10)ラッセルが終生繰返した『固有名には意味がない』という主張は PoM 説と整合的であることに注意

- されたい。なぜなら、固有名は語であって、命題の構成要素では（通常は）ないから。
- (11)これは独立の論文ではなく、マッコール（Hugh MacColl）の論文に対する批評として書かれた。
- (12)以下に言及した論理形式の取出しのすべてがラッスルの創見なのではない。ブールは早くに全称命題と特称命題の根本的な違いを見抜いていたし、ラッスルが注記した通り（OD, p. 43）、ブラッドリは全称命題が実は仮言命題であると考えていた。フレーゲやペアーノの寄与は言うまでもない。
- (13)“Scope”の問題について詳しくは、cf. Sainsbury, pp. 66-9
- (14)但し後年のラッスルは厳密な意味での固有名（論理上の固有名）を主語とする存在命題は無意味であり、有意味であるときはそれは本当は固有名でなく表示句なのであると主張した。Cf. Russell [PLA], pp. 250-2.
- (15)このことの指摘は Kaplan, pp. 227-33; Linsky [1977], p. 39; Wilson, p. 48などにもある。
- (16)‘*x* begat Charles II’ というのは ‘*x* was a father of Charles II’ という破格の言い方を避ける工夫であろう。
- (17)ここでの記号法は大体クワインに従った。
- (18)英語で ‘the so-and-so’ がつねに uniqueness の含みをもつとは限らない。例えば、‘*The whale is a mammal.*’ この指摘は Moore, pp. 182-3; Stebbing, p. 149にあるが、当面の論点には影響はない。
- (19)‘Charles I’ は固有名の代表的なものとはいえないかも知れぬ。Cf. Russell [PoM], p. 64.
- (20)Existence ならざる“存在”の方にラッスルは ‘subsist’, ‘subsistence’ を当てた。但しこれに反する言い方も見られる: [OD], p. 45.
- (21)Cf. Gram; Haack [1974], pp. 133-5; Linsky [1977], pp. 33-6. なお Lackey は Russell [EA] 中の解説 pp. 17-20 でラッスルとマイノングの関係を簡潔に述べている。
- (22)これは記述句の作用範囲（scope）の問題である。注(13)に挙げたものの他、cf. Linsky [1977], pp. 27-9; 土屋, pp. 2-4.
- (23)Frege [GG], Bd. I, S. 19 では別の規約が提案されている。なお、二つ以上の対象があつて uniqueness の条件が満たされない場合のことも考えねばならぬが ([OD], p. 47)、ここでは省略する。
- (24)Cf. Strawson [1950], pp. 12-3; [1952], pp. 175-9; Carnap, 8. フレーゲの方針(b)に対する評価は Linsky [1977], Ch. 2 に詳論されている。
- (25)Cf. Ayer, p. 32; Haack [1978], p. 67.
- (26)論点の概観は野本 [1972], pp. 478-83にある。
- (27)‘denoting complex’ に関してはいく通りもの解釈がある。われわれの解釈は、Jager [1960] のを採らず、Geach [1959] に従う。ラッスルが [OD] と同じ時期の [EIP] で表示概念に対して ‘complex concept’ なる語を当てていることも一つの間接的な証拠になろう。
- (28)‘*Waverley*’ という作品名も常識的に見れば固有名であるが、ここでは命題関数 ‘*x* wrote *Waverley*’ の一部として現れていて分離できぬと扱うのである。余談ながら、作品名は固有名か否かという面白い問題については、Nowell-Smith 参照。
- (29)その“系”として次の二点を付加えてよいであろう。(a) 固有名は作用範囲の曖昧さを生じない。
(b) 固有名は（後にクワインによって定着された術語——実はラッスルに由来する——で言えば）指示対象に関して透明（referentially transparent）である。
- (30)後にラッスルはこの趣旨で記述句は不完全記号（incomplete symbols）に属する、と言った。不完全記号は単独では意味をもたず、その定義は或る文脈においてのみ下される。Cf. Whitehead and Russell, p. 66.
- (31)「空である名」（vacuous or empty names）と「仮空の対象の名」の異同については今少し詳しい検討が必要かも知れぬ。
- (32)Cf. Russell [PLA], p. 201.

参 考 文 献

(本文で指示しなかったものを含む)

- Ayer, A. J. *Russell and Moore. The Analytical Heritage*, Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1971.
- Butler, R. J. 'The Scaffolding of Russell's Theory of Descriptions.' *Philosophical Review* **63** (1954), 350—64.
- Cappio, James. 'Russell's Philosophical Development.' *Synthese* **46**, 2 (Feb. 1981), 185—205.
- Carnap, Rudolf. *Meaning and Necessity*. Enlarged edn. Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1956.
- Cassin, Chrystine E. 'Russell's Discussion of Meaning and Denotation: A Re-examination.' Klemke, E. D. (ed.), *Essays on Bertrand Russell* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1970), 256—72.
- Coffa, J. Alberto. 'Russell as a Platonic Dialogue.' *Synthese* **45**, 1 (Sept. 1980), 43—70.
- Frege, Gottlob. [SuB] 'Ueber Sinn und Bedeutung.' *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik* **100** (1892), 25—50.
- , [GG] *Grundgesetze der Arithmetik*. 2 Bde. (1893—1903) Nachdr. Hildesheim: Georg Olms, 1962.
- Geach, P. T. [1959] 'Russell on Meaning and Denoting.' Repr. in Geach, P. T., *Logic Matters* (Oxford: Basil Blackwell, 1972), 27—31.
- , [1968] *Reference and Generality*. Emended edn. Ithaca: Cornell Univ. Press, 1968.
- Gram, M. S. 'Ontology and the Theory of Descriptions.' Klemke, E. D. (ed.), *op.cit.*, 118—43.
- Griffiths, D. A. 'A Reconsideration of Russell's Early Ontological Development.' *Philosophical Quarterly* **31**, 123 (April 1981), 145—52.
- Haack, Susan. [1974] *Deviant Logic. Some Philosophical Issues*. Cambridge: Univ. Press, 1974.
- , [1978] *Philosophy of Logics*. Cambridge: Univ. Press, 1978.
- Hursthouse, Rosalind. 'Denoting in the Principles of Mathematics.' *Synthese* **45**, 1 (Sept. 1980), 33—42.
- Hylton, Peter. 'Russell's Substitutional Theory.' *Synthese* **45**, 1 (Sept. 1980), 1—31.
- Jager, Ronald. [1960] 'Russell's Denoting Complex.' *Analysis* **20**, 3 (Jan. 1960), 53—62.
- , [1972] *The Development of Bertrand Russell's Philosophy*. London: Allen & Unwin, 1972.
- Kaplan, David. 'What is Russell's Theory of Descriptions?' Repr. in Pears, D. F. (ed.), *Bertrand Russell: A Collection of Critical Essays* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1972), 227—44.
- Linsky, Leonard. [1967] *Referring*. London: Routledge & Kegan Paul, 1967.
- , [1977] *Names and Descriptions*. Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1977.
- Moore, G. E. 'Russell's "Theory of Descriptions".' (1944) Repr. in Moore, G. E., *Philosophical Papers* (New York: Collier Books, 1962), 149—92.
- 野本和幸 [1971] 'Bertrand Russellの存在論<その1>.' 『茨城大学教養部紀要』第3号(1971), 1—26.
- [1972] 'バートランド・ラッセルの記述理論形成の過程.' 『哲学研究』第45巻第6冊(1972年12月), 470—94.
- Nowell-Smith, P. H. 'Report on *Analysis* Problem No. 13.' *Analysis* **19**, 1 (Oct. 1958), 1—3.
- Pears, David. *Bertrand Russell and the British Tradition in Philosophy*. London: Collins, 2nd edn. 1972.
- Russell, Bertrand. [EA] *Essays in Analysis*. (Lackey, Douglas. ed.) London: Allen & Unwin, 1973.
- , [EIP] 'The Existential Import of Propositions.' (1905) Repr. in [EA], 98—102.
- , [IMP] *Introduction to Mathematical Philosophy*. (1919) London: Allen & Unwin, 1967.
- , [LK] *Logic and Knowledge: Essays 1901—1950*. (Marsh, Robert C. ed.) London: Allen & Unwin, 1956.
- , [OD] 'On Denoting.' (1905) Repr. in [LK], 41—56.
- , [PLA] 'The Philosophy of Logical Atomism.' (1918—19) Repr. in [LK], 177—281.
- , [PoM] *The Principles of Mathematics*. (1st edn. 1903; 2nd edn. 1937) New York: Norton, n. d.
- Sainsbury, R. M. *Russell*. Henley-on-Thames: Routledge & Kegan Paul, 1979.

- Stebbing, L. S. *A Modern Introduction to Logic*. 3rd edn. London: Methuen, 1942.
- Strawson, P. F. [1950] 'On Referring.' Repr. in Strawson, P. F., *Logico-Linguistic Papers* (London: Methuen, 1971), 1–27.
- , [1952] *Introduction to Logical Theory*. London: Methuen, 1966.
- 土屋純一, 'Belief Sentence の諸問題(二).', 『金沢大学法文学部論集』哲学篇 **26** (1978), 1–18.
- Watling, John. *Bertrand Russell*. Edinburgh: Oliver & Boyd, 1970.
- Whitehead, Alfred North & Russell, Bertrand. *Principia Mathematica*. Vol. I. (1st edn. 1910; 2nd edn. 1925) Cambridge: Univ. Press, 1950.
- Wilson, George. 'On Definite and Indefinite Descriptions.' *Philosophical Review* **87**, 1 (Jan. 1978), 48–76.
- 文献を貸して下さった野本和幸氏 (茨城大学) に謝意を表したい。